講義名	対)教養特講Ⅰ（歴史学）				
担当教員	堅田　智子				
開講期・曜日・時限	前期 木曜日 ３時限			授業形態	講義
履修開始年次	１年生	単位数	2	備考	

主題と概要

主題：「歴史学へのいざない:日独関係史に見る日本イメージの形成・発信・受容」
概要：
　「歴史」に対して、皆さんはどのようなイメージをもっているでしょうか。なぜ、小学校から高等学校まで、私たちは「歴史」という科目を学び続けなければならなかったのでしょうか。
　本授業では、学問としての「歴史学」へのいざないとして、高等学校まで学んだ科目としての「歴史」との違いを意識しながら、具体例として日独関係史における、ドイツ人による日本イメージの形成・発信・受容について取り上げていきます。

到達目標

　暗記型の「歴史」から脱却し、思考型の「歴史学」にふれることが、本授業での最大のねらいです。本授業を通じて学生は、「歴史学」で重んじられる批判的視点を習得し、大学での専門的な学びに生かしていくようになります。また、情報化社会を生きていく中で、無批判に情報を信用するのではなく、一度立ち止まり、主体的に論理的に情報の取捨選択ができる力、客観的に事象をとらえる力を身につけるようになることこそ、本授業の最終的な到達目標です。

提出課題

リアクションペーパー：毎回、responを利用し、授業内で提示した問いに対する答え、感想、質問等を記入し、提出します。
中間試験：授業内で課題を提示します。
学期末試験：授業内で課題を提示します。

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバック

リアクションペーパー：授業冒頭で、前回、提出されたリアクションペーパーを利用し、授業内容の復習や質問への回答、補足説明を行ないます。
中間試験：希望者には、期日までに一度、課題の仮提出を行なうことを認めます。提出された課題は、採点の上で返却します。受講生は加筆・訂正を行ない、最終提出をすることで、受講生自身がみずからの提出した課題の問題点を理解し、是正できるようにします。

評価の基準

リアクションペーパー（45%）、中間試験（25%）、学期末試験（30%）を総合して、評価をします。
　評価の基準は、1. 授業内容を理解し、到達目標に達しているか、2. 主体的に問題意識をもち、それを論理的な文章によって表現し、他者に伝えることができるか、という2点です。授業回数全15回のうち5回以上欠席した場合、中間試験、学期末試験を未受験であった場合は、評価の対象としません。

履修にあたっての注意・助言他

　本年度は、対面型授業とオンデマンド型授業を並行開講します。大学の授業開講方針および新型コロナウイルス感染拡大状況を鑑み、授業形式を学期中に変更する場合もあります。授業の進め方（暫定）は以下のとおりですが、詳細は初回授業内で説明します。
　本授業を受講するにあたり、積極的な質問・意見を歓迎します。

《対面型授業の場合》
①授業日2日前（火曜日）までに、RYUKA Portal講義連絡にプリント資料（レジュメ）およびリアクションペーパー用のrespon番号を掲示。授業までに各自、プリント資料をプリントアウトし、目をとおしておく。
②授業を受講し、期日までにresponに回答・提出する。
※授業中、スマートフォンなど授業に不要なものは、鞄の中にしまいましょう。私語は慎み、大学生として良識ある態度で授業に臨みましょう。

《オンデマンド型授業の場合》
①授業日2日前（火曜日）までに、RYUKA Portal講義連絡にプリント資料（レジュメ）およびリアクションペーパー用のrespon番号を掲示。授業までに、各自、プリント資料をプリントアウトし、目をとおしておく。
②遅くとも対面型授業が終了した翌日中（金曜日）には、対面型授業を撮影した動画をYouTubeにアップロード。動画を視聴し、期日までにresponに回答・提出する。

教科書

.使用しない.				

プリント資料及び参考文献

　プリント資料をもとに、授業を進めていきます。プリント資料は、RYUKA Portalに掲示しますので、授業までに各自、プリントアウトし、持参してください。主要参考文献は、以下のとおりです。　このほか、各回のプリント資料にも参考文献を挙げます。

1. 大学の歴史教育を考える会編『わかる・身につく歴史学の学び方』大月書店、2016年。
2. 北村厚『教養のグローバル・ヒストリー――大人のための世界史入門――』ミネルヴァ書房、2018年。
3. 水島司『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社、2010年。

授業計画

第1回　ガイダンス
第2回　高等学校の「歴史」から大学の「歴史学」へ
第3回　歴史学を学ぶということ
第4回　〈黎明期〉歴史書に描かれた日本
第5回　〈基礎期〉回想録、旅行記に描かれた日本
第6回　〈基礎期〉万国博覧会における日本展示とジャポニスム
第7回　レポートを書くということ①
第8回　〈転換期〉戦時下における日本イメージ
第9回　〈転換期〉ドイツ人俘虜による日本体験と日本イメージ
第10回　〈再接近期〉プロパガンダ題材としての日本イメージ
第11回　〈再接近期〉プロパガンダ題材としてのドイツイメージ
第12回　〈再転換期〉敗戦国ドイツと日本
第13回　〈再転換期〉日本学（Japanologie）から日本研究（Japanese Studies）へ
第14回　レポートを書くということ②
第15回　まとめ

※対面型授業を履修する学生で、一時的に通学困難になった場合、学生は必ず担当教員に連絡し、指示を仰いでください。学生の状況に応じ、代替内容を提示します。

授業形態（アクティブ・ラーニング）

○	ア：PBL（課題解決型学習）		イ：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
	ウ：ディスカッション、ディベート		エ：グループワーク
	オ：プレゼンテーション		カ：実習、フィールドワーク
	キ：その他（ＡＬ型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合）		

準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

予習（目安として1時間以上）：プリント資料をあらかじめRYUKA Portalに掲示しますので、プリントアウトし、目をとおしておきましょう。
復習（目安として1時間以上）：プリント資料をもとに、授業内で挙げた参考文献やインターネットを活用しながら、授業内容を復習してください。

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

　本授業の到達目標は、主体的に情報の取捨選択ができる力、客観的に事象をとらえる力、みずからの考えを論理的に文章として表現し、他者に伝える力を身につけることです。これは、　本学学生が卒業時に共通して身につけておくべき資質・能力5項目のうち、②知識を知恵に転換することができる、論理的思考力、③創造力（新しい視点と豊かな発想）、④自主・自立の精神の育成に寄与するものです。

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

　既述のとおり、毎回、responを利用し、授業内で提示した問いに対する答え、感想、質問等を記入するリアクションペーパーの提出を求めます。授業冒頭で、前回、提出されたリアクションペーパーを利用し、授業内容の復習や質問への回答、補足説明を行なうことにより、ICTを活用した双方向型授業を実施します。

実務経験の有無及び活用

実務経験なし

備考

　本年度は、対面型授業とオンデマンド型授業を並行開講しますが、シラバスの内容は同一です。
　対面型授業を履修する学生で、一時的に通学困難になった場合、学生は必ず担当教員に連絡し、指示を仰いでください。学生の状況に応じ、代替内容を提示します。